

## 腎不全診療における未解決課題と将来展望

The unsolved problems and future perspectives in the management of the patients with kidney failure

花房 規男

Norio HANAFUSA

東京女子医科大学血液浄化療法科 (准教授)

### ◆ KEY WORDS

- ◆高齢化
- ◆治療の多様性
- ◆長期腹膜透析
- ◆腎機能改善
- ◆個別化

### ◆ SUMMARY

血液透析については、既存の技術自体、治療量の再検討とともに、装着型人工腎臓に代表される新たな取り組みが期待される。腹膜透析では、高効率の治療とともに、被嚢性腹膜硬化症への解決が望まれる。一方、保存期腎不全では、腎機能の改善、血管病変の退縮などが課題として考えられる。今後、高齢化する患者背景を基に、こうした新規技術を実際の臨床現場でどのように適応していくかについても検討が必要とされている。

### ◆ 著者プロフィール

- ◆私の専門分野
  - ・血液浄化療法
  - ・腎不全医療
  - ・栄養療法

### I 患者背景の変化とその対策

現在、我が国の透析患者は30万人を超えており、透析が開始されて以来、その数は一貫して増加している<sup>1)</sup>。一方、年代別にその人口を見ると、70歳以上の患者が増加していることがわかる<sup>2)</sup>。こうしたことから、透析医療、さらには慢性腎臓病 (CKD) に対する医療において、高齢者への対策が重要な位置付けを占めている。

高齢者では、身体機能の低下、精神・認知機能の低下、経済・社会的な問題など様々な問題が存在する<sup>3)</sup>。実際に対策を考えた際にも、高齢者においては若年者と異なる点が存在する。臨床検査値では、例えば、ヘモグロビン (Hb) 値<sup>3)</sup>、血清リン値<sup>3) 4)</sup>の分布は若年者と高齢者で異なる。臨床的なアウトカムにおいても、高齢者では若年者に比較して死亡率が高く、QOLが低い<sup>5)</sup>。さらに、若年者のような生命予後ではなく、QOL、ADLといったアウトカムがより重要になる可能性もある<sup>3) 6)</sup>。また、リスクファクターが若年者と異なる可能性も示唆されている。例えば、性別と生命予後との関連

においては、若年者と高齢者とは異なること<sup>7)</sup>、ヘモグロビンと生命予後との関連においても、高齢者ではやや低めのHb値でも不良な予後と関連しない可能性があること<sup>8) 9)</sup>、さらに、低リン血症が高齢者では特に不良な予後と関連すること<sup>4)</sup>などが示されている。このように、高齢者では若年者と比較し、様々な点で合併症に対する対策も異なる可能性がある。

一方、高齢者ではサルコペニア、protein energy wasting、フレイルといった、消耗・栄養状態の悪化と深い関連がある病態が高率に見られることが明らかになっている<sup>10)</sup>。こうした病態に対し、近年では栄養療法<sup>11)</sup>や運動療法<sup>12) 13)</sup>に注目が集まっている。しかし、その対象患者だけではなく、どのような介入を、どのタイミングで行うかなどについては、明らかになっていない点が多い。

さらに、高齢者においては、若年者に比較して不均一性がより大きい可能性がある<sup>14)</sup>。このことは、より個別性を持った対応が必要とされるだけではなく、実年齢だけでは高齢者の特性を表せない可能性がある。こうした実年齢だけではなく、表現型を基にした、